

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第十七回）

はつ　せ　がは
「泊瀬川」

いはばし　たぎ
1) 石走り　激ち流るる　泊瀬川

絶ゆることなく　またも来て
見む

作者・紀朝臣鹿人　きのあそみかひと
卷六―九九一

（解説）石の上を激しく流れて行くその壮観な泊瀬
川の眺めをまた来てみたいものだ。

しらゆふはな
2) 泊瀬川　白木綿花に　落ちた

さや　こ
ぎつ　瀬を清けみと　見に来

われ
し我を　作者・未詳　卷七―一一〇七

(解説) 白木綿花 (楮こうぞの皮の繊維を白くさらした造花)のような美しい白い波を立てて激流する泊瀬川の瀬の景色があざやかで清らかであるから見に来た自分である。

①この歌(巻六―九九一)の題詞は「泊瀬川の邊ほとりに至りて作る歌一首」とある。

②この万葉集で詠われている「泊瀬川」は今の「初瀬川」はせがわの古称である。

③「初瀬川」は奈良県中部に位置する桜井市の東北山中(大字小夫・白木付近)おおぶに発し一年を通じてさまざまな花が咲き誇り「奈良大和路の花の御寺」みでらとして親しまれている「長谷寺」のある初瀬から溪谷を西流する長さ約二十八kmの川である。そののち大小多数の支川を合わせながら「大和川」と川名を変えて奈良県から大阪府に

流れ大阪平野を経て大阪湾に注ぐ川である。

(参考文献) 日本古典文学大系「万葉集」 山内英正著「万葉の

歌」等

(写生地)

・前面高台にある長谷寺と麓に長谷寺の門前町「初

瀬」の街並み、その街中を今も滔々とうとうと流れる水が

岩にぶつかり砕け散り白い波を立てて激流する

壮観な初瀬川を描く。(池田杏花)

